

ており、被災状況などは当時の資料などを引用しているが、現地を確認することで浸水被害は多量な降雨量など外的要因だけでなく、周囲の特異な地形などによる集水環境であるなどその地域の特性そのものが持つ素因が重要であることが確認できた。

また、我国には地震災害と同様に長い水害の歴史があり、丸森町も過去に幾度か水害を経験している。このような歴史的な経緯から水害に対する地域住民の防災意識も高いものと考えられる。災害時の防災対策や避難計画に関する地域社会の共通認識も潜在的にあるものと思われるが、豪雨災害が多発しつつあり災害環境の変化と防災意識や防災対策の変化など地域社会の共通した認識に関する調査については今後の課題である。また、地域社会における災害環境の認識は、アジア地域の国々でも同様に存在していると考えられ、今回の視察結果を共同研究に活かして行きたいと考えている。

【追記】本原稿の執筆にあたって、研究分担者である落合努氏(神奈川大学工学部特別助手)は、当該現地視察に同行は

叶わなかったが、別途被災調査を行って居られたため、資料提供頂き共同執筆に加わって頂いた。

【参考資料】

国土地理院:地理院地図、<https://maps.gsi.go.jp/>
 宮城県丸森町:丸森町復旧・復興計画、
<http://www.town.marumori.miyagi.jp/fukkou/keikaku/fukkouplan.html>
 宮城県:高齢者人口調査結果(令和2年)、
<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/chouju/02koureisazinkou.html>
 気象庁:世界の異常気象、
https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/monitor/extreme_world/index.html
 気象庁:台風19号による大雨、暴風等、
https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/2019/20191012/jyun_sokuji20191010-1013.pdf
 内閣府:令和3年版防災白書、
<http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/r03/index.html>
 柴山明寛、他:日本学術会議公開シンポジウム 令和元年台風19号に関する緊急報告会、2019/12/24
 河北新報社:特別報道写真集2019.10 台風19号豪雨 宮城・福島・岩手の記録、2019/11/22



調査報告

声と死——ホー・ツーニェン『ヴォイス・オブ・ヴォイド——虚無の声』

1. テーマとしての「京都学派」

アーティストのアイデンティティ、テクノロジーを取り入れた多様な表現手段、政治的なテーマなど、現代美術の特徴的な一面を担って活躍をつづけるホー・ツーニェン(Ho Tzu Nyen 1976～、シンガポール生)による新作『ヴォイス・オブ・ヴォイド——虚無の声』展が、山口情報芸術センター[YCAM]とのコラボレーションによって開催された(2021.4.3～7.4)。

この新作に関して、「ホー・ツーニェンからのメッセージ」(『any』2021.4)には、「アジアにおける日本の軍事行動が激化した1930～40年代に、日本の知識人たちが産み出した様々な理論的テキストを舞台に上げを試みます」、「本作で扱うテキストや個人は、東洋の観念を取り入れることで西洋哲学を乗り越えようとした西田幾多郎(1870～1945)を中心に形成された、京都学派と呼ばれるグループを通してつながっています」といった問題関心が示されている。本作は、「京都学派」をテーマにしたVRとアニメーションに

所員 神奈川大学国際日本学部教授 松本 和也

よる映像インスタレーションである。

このように複雑なかたちで東洋/西洋が折り重ねられた『ヴォイス・オブ・ヴォイド——虚無の声』の設定は、所属する研究班「アジア圏における文化の生成・受容・変容」の問題関心にも重なる。

今日「京都学派」といえば、開戦前夜に開催された座談会「世界史的立場と日本」(『中央公論』1942.1)をはじめとした「世界史の哲学」が、太平洋戦争に思想的根拠を与えたと目され、それゆえ批判されてきたことで知られる。このような含意をもつ「京都学派」を、太平洋戦争緒戦の地となったシンガポール出身のアーティストがとりあげて日本で発表する——ここにすでに、『ヴォイス・オブ・ヴォイド——虚無の声』のクリティカルな一面がみてとれる。

2. 思想-テキストとくささやき声

第一の部屋は「左阿彌」の茶室と題され、映画館のような客席の正面に、2つのスクリーンが二重写しに



(撮影：三嶋一路、写真提供：山口情報芸術センター [YCAM])

設置されている。

1つのスクリーンでは、「京都学派四天王」と称された高坂正顕、西谷啓治、高山岩男、鈴木成高が京都の料亭「左阿彌」の茶室に集い、座談会「世界史的立場と日本」を行っている。同時にもう1つのスクリーンでは、西田幾多郎『日本文化の問題』が紹介されていく。両者とも柔らかい雰囲気のアニメーションで描かれ、そのことで鑑賞者(大半は現代日本人)にとって「京都学派」への隔たりは溶かされていく。

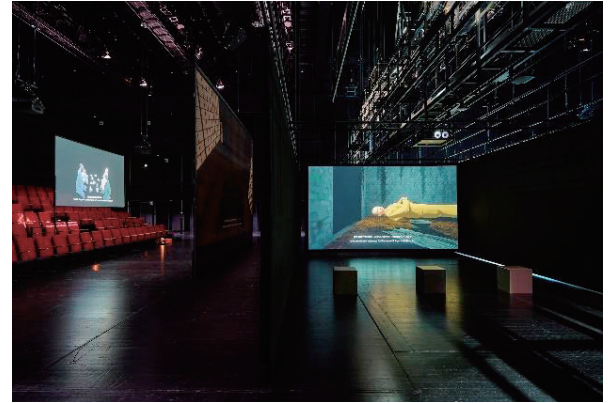
その際に特徴的なのは、2つのスクリーン-テキストによって太平洋戦争に対する複数の姿勢が示されることと、テキストがすべて〈ささやき声〉によって読まれていくことである。〈ささやき声〉で読まれたテキストは、輪郭をもった明確な主張というより、観客が自らの感情や思索を代入しやすい手がかりとして提示される(映像がアニメーションであることも、こうした参入を容易にするだろう)。もちろん、鑑賞者はこの〈ささやき声〉を通じて、展示会場において「京都学派」(の思想-テキスト)を読み、学習していく。

こうした仕掛けによって、「京都学派」(の思想-テキスト)は、当時-当事者たちの複雑な相貌を取り戻すように「再演」されゆき、そこに現代美術としての本作のポジティブな意義も浮かびあがる。

第二の部屋は「監獄」と題され、右よりのイメージが強い「京都学派」にあって、反体制的な活動によって獄死するに至った、左よりの三木清(豊多摩刑務所)と戸坂潤(長野刑務所)がとりあげられる。ここでも、2人が書いた強度のあるテキストが〈ささやき声〉によって読まれていく。そのことで鑑賞者は、〈死〉を迎えていく2人の思想-テキストを体感していく。

先の第一の部屋が「京都学派」主流派をモチーフとしていたことに比して、第二の部屋ではその傍系がモチーフとされ、両者が並べられたことによって、本作には「京都学派」思想の振幅も示される。会場全体の暗

さがひとときわかされた第二の部屋では、刑務所とそこに横たわる身体によって〈死〉が描かれる。こうして、「京都学派」(の思想-テキスト)に通底する〈死〉のイメージが、第一の部屋とあわせて示される。



(撮影：三嶋一路、写真提供：山口情報芸術センター [YCAM])

第三の部屋は「空」と題され、鑑賞者用のスペースを挟むように2つのスクリーンが設置されている。スクリーンに広がる青空には、ザク(『ガンダム』)を模したかのようなモビルスーツが飛んでいる。もとよりそれは、戦闘機(ともすると特攻機)の代理表象である。そこで〈ささやき声〉が読みあげていくのは、徴兵学徒に向けた公開講座、田邊元「死生」(1943)——大東亜戦争の意義を騙り、青年を死に向かわせたと批判されるテキストの1つであった。

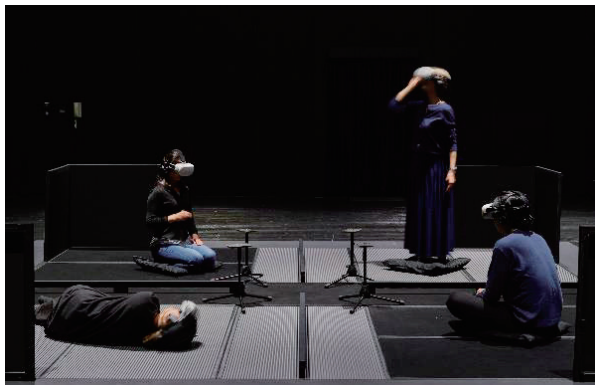
3. VRと〈死〉

ここまでの3室を垂直軸に再構成したVR体験「座禅室」が、最後に用意される。ここで鑑賞者は、横たわる-座る-立ち上がる、という身体動作を介して、3つのスペース-映像をリアルに体験していく。

座ると、そこでは座談会「世界史的立場と日本」が行われており、鑑賞者は筆記者の大家益造として、手を動かせば4人が語り、手を止めれば自身の心の〈声〉——戦後に読んだ短歌が聞こえてくる。ならば、これまでの〈ささやき声〉も、誰かの心の〈声〉であった可能性が浮上する。

その場に横たわると独房が写し出され、ここでは三木清「支那事変の世界史的意義」と戸坂潤「平和論の考察」が〈ささやき声〉によって語られていく。戦争への抵抗であった2人の思想-テキストだが、その帰結が〈死〉でもあったことが表現される。

立ち上がると、広がる青空の中を数体のモビルスーツが飛んでおり、鑑賞者の視点も機体の中に設定されている。田邊元「死生」が〈ささやき声〉によって聞こえてくると、前後して、周囲の機体が音もなく分解し、散っていく。こ



(撮影：三嶋一路、写真提供：山口情報芸術センター [YCAM])

これは、近く鑑賞者にも〈死〉が訪れることを示している。
 こうした展示構成からは、危機として迫る太平洋戦争-〈死〉に対して、アニメーションと〈ささやき声〉によって「京都学派」が発信した思想-テキストを「再演」する作品として、『ヴォイス・オブ・ヴォイド——虚無の声』を捉えることができる。その意味で本作は、吉田傑俊が

「『京都学派』の哲学が決して単一体ではなく、戦争への関与において決定的な分裂を示した」(『『京都学派』の哲学』大月書店、2011)と指摘する特徴をよく体現していた。

ただし、そうした複数性は、その実、ある一点を志向していた——鑑賞者として〈ささやき声〉を聞き-読むことを通じて「京都学派」の思想-テキストを読み、VRを体験するならば、この戦争に関わっては、料亭／刑務所／前線のどこにいても〈死〉と無縁ではないことがわかる。それでいて、〈死〉への関わり方には多様な思索、複数の立場・選択肢があり得たことも示される。こうした本作に重ねて、太平洋戦争末期のフィリピンで九死に一生を得た大岡昇平による「未来には死があるばかりであるが、我々がそれについて表象し得るものは完全なる虚無」(『俘虜記』)という一節を想起するならば、「京都学派」(の思想-テキスト)を「再演」する意味が、太平洋戦争とその〈死〉の問い直しにあったことは明らかである。

2021年度 アジア研究センター活動報告

2021年4月～2021年9月

共同研究グループ主催による公開講演会

- 研究グループ：「植民地国家と近代性：
アジア諸国を中心とする比較研究」
日 時：2021年7月17日(土)
テーマ：「学術出版のゆくえ—人文・社会科学を中心に」
講演者：勝 康裕氏(編集者・元法政大学出版局)
- 研究グループ：「アジアの社会遺産と地域再生手法」
日 時：2021年7月20日(火)
テーマ：「ベトナム・ハノイ 変化する都市の文化遺産」
講演者：柏原 沙織氏(東京大学大学院新領域創成科学研究科
自然環境学専攻 特任助教)
- 日 時：2021年8月25日(水)
テーマ：「ベトナム・サイゴンの建築と都市の文化」
講演者：李 暎一氏(一社)アジア建築集合体 会長)

共同研究グループによる出張

- 研究グループ：「アジア圏における文化の
生成・受容・変容」
《国内》
出張者：松本 和也(所員 本学国際日本学部教授)
出張先：山口情報芸術センター(山口県)
日 程：2021年6月27日(日)～6月28日(月)
目 的：近代文化関連資料の閲覧・調査
- 出張者：松本 和也(所員 本学国際日本学部教授)
出張先：パルコ de 美術館、碌山美術館(長野県)
日 程：2021年9月7日(火)～9月8日(水)
目 的：近代文化関連資料の閲覧・調査
- 研究グループ：「アジア地域の災害軽減化と防災・
減災ネットワーク構築に関する研究」
《国内》
出張者：荏本 孝久(所員 本学工学部教授)
佐藤 孝治(客員研究員 本学名誉教授)
出張先：宮城県、岩手県
日 程：2021年5月28日(金)～5月30日(日)
目 的：被災地の復興状況調査

【お詫びと訂正】7月発行の「神奈川大学アジア研究センター CAS NewsLetter No.15」10頁において、出張者の肩書に誤りがありましたので下記のとおり訂正いたします。誤記によりご迷惑をおかけした佐藤孝治先生及び関係の皆様へ深くお詫び申し上げます。

(誤) 佐藤 孝治(客員研究員 本学経済学部非常勤講師) (正) 佐藤 孝治(客員研究員 本学名誉教授)